

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 54

2014年 11月



「平和の架け橋」プロジェクトでの一コマ。大槌町の及川様ご夫妻宅を訪問、心温まる一時。

支援者の皆さま

今夏、2000人を超す犠牲者を出して以来、イスラエルとパレスチナ双方の住民感情が悪化しています。互いの不信と恐怖が、発砲や投石、ひき逃げなどの暴力となって噴出しているのです。「平和の架け橋」プロジェクトに参加して“平和共存”を体験した若者たちも戸惑い、心を痛めています。

混乱の中で真っ先に傷つくのは子どもたちです。その傷が憎しみと暴力につながらないよう将来への希望を与えるもの、それは正しい知識と、学ぶ喜びです。ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフサイさんが言うように「一本のペン、一冊の本こそ平和への道を開くもの」。聖地の平和と安定のために、引き続きご支援をお願いいたします。

理事長 井上 弘子



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : ispalejpn@google.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると認定されました。

実りがありました！

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋

PROJECT 2014
IN 東北

2014年もたくさんの実りがあった“平和の架け橋”プロジェクト。あらましと参加者の感想をお伝えします。



▲大槌小学校、学童保育で。外国のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちと初めてのご対面。

プロジェクトのあらまし

8月5日(火) 日本に到着したイスラエル、パレスチナの若者たちは、東京駅で日本人グループと合流、夕方5時半にカリタスジャパン大槌ベースに到着した。初めて直接会ってすぐに仲良くなり、プロジェクト成功に向けて一致団結して動き始めた。

8月6日(水) 旧町役場など、震災以前の町の中心部を訪問。かつて町がどのように広がっていたか、津波がどのように襲い人々の命を奪ったのかを真剣に聞き入った。

午後はカリタスベースに戻ってシェアリング。イスラエル・パレスチナの学生たちが自らの経験を絡めて大槌町の印象を語っていたのが印象的だった。その後、旧町役場の保存に賛成派、反対派、中立派の3者に分かれてディスカッションを行うUNゲームに挑んだ。

8月7日(木) 大槌川の河川敷で菜の花畑を作られている金山さんのプロジェクトに参加。金山さんが自作の紙芝居で震災直後の様子を生々しく語ってくださった。美しい川が津波の被害で瓦礫の山となり、多くの人々が地元の学校に避難していたこと、高校生たちが小学生たちを助けてボランティアを行っていたことなどだ。

その後、河川敷清掃活動に参加した。ベースに戻った後は、地元で私たちをいろいろ助けてくださった及川ご夫妻宅を訪問し、震災直後の様子を聞いたり、公開されていない津波のビデオを見たりした。ご夫妻は遠い異国の地から来たイスラエル・パレス

チナの学生たちにとっても親切に接してくださった。

8月8日(金) 大槌小学校を訪問、子供たちと交流した。私たちは模擬店の売り子として参加し、子供たちとも仲良く遊んだ。昼食時には、モール、ワシム、ニコラスの3人がウクレレで即興バンドを組み、歌った様子にみんな大喜びであった。

午後は公衆銭湯に。イスラエル、パレスチナには湯船がないため、初めての経験に大満足。夜には手巻き寿司パーティーに大喜びで、日本文化に接することの多い一日であった。

8月9日(土) 近くで行われる大槌ロックフェスティバルにボランティアとして参加。車の誘導作業を中心に地元の人々と交流した。夜は翌日の交流会のための歌やダンスの練習。

8月10日(日) 交流会準備。パレスチナ料理店主のシャディさんが、大槌中央公民館の調理場で陣頭指揮を執り、若者たちはダンスのリハーサルなど。

午後の交流会、地元の若者たちによる郷土芸能「向川原虎舞」「白澤鹿子踊り」。日本人グループは「南中ソーラン」を踊った。大雨が降る中、100席ほど用意した会場は人で埋まっていた。

「花は咲く」の合唱が終わると食事の時間。中東の料理を珍しそうに味わい、質問する姿があちこちで見られた。終了近くには盆踊りの輪ができ、地元のお年寄りの「押してー、押してー…」などの音頭に合わせてみんなで踊った。

8月11日(月) 大槌町での最終日は午前中、仮設住宅を訪問して、住民の方々と風船バレーボールを楽しんだ。お年寄りも子供も皆一緒に、大きな声

を出して思いきり体を動かす楽しいひと時であった。夜 11 時ごろ、大槌町を後に、夜行バスで東京へ向かった。

8月12日(火) 早朝、JICA 東京国際センターに到着。オリエンテーションの後、東京大空襲・戦災資料センターを訪問した。

8月13日(水) 午前中は、大槌町でのプログラムを振り返るとともに、印象に残ったことを語り合った。イスラエル・パレスチナの参加者が、大槌町で学んだことへの感謝を口にしていたのが印象的であった。

その後、前日の東京大空襲・戦災資料センターに関する作業。まず、大空襲についてより深く知るために、グループに分かれてリサーチの後、互いに発表し合い、大きな輪に戻って感想を語り合った。午後は、シミュレーションゲーム。アフリカの難民キャンプでの資源開発事業について、賛成・反対・調停の3つの立場に分かれてディスカッションを行った。

8月14日(木) 夕方までシェアリングや振り返り。夕方からは自由行動。

8月15日(金) 翌日に迫る報告会の発表準備、レポート作成、そして最後のシェアリングに一日を費やした。

8月16日(土)

午前中は報告会の準備。1時から会場の準備。14時～17時に開催された報告会のプログラムは以下のとおり。

- 挨拶・自己紹介
- 参加者によるプレゼンテーション
- ボランティア活動に関する感想披露
- 写真と映像視聴
- 来場者との分かち合いと交流
- 日本人参加者によるソーラン節
- 合唱「花は咲く」
- 来場者参加型の盆踊り

夜には中華料理レストランでお別れ会が行われた。早朝に帰国するメンバーもいたため、名残惜しい中、みんなで思い出を共有しあった。

8月17日(日) プロジェクト最終日、参加者は東京観光と買い物を楽しんだ。(川橋天地・編集部)

参加者の感想

◎いづれ大きな平和に

中尾 有希

大槌町に到着してまず感じたことは、「東京と時間の流れが違う」ということだ。東京に住んでいると、震災を思い出すようなことはもうほとんどない。少なくとも私の周りにはいる人々は、震災の前後で生活が変わった人はほとんどいない。けれども、大槌町は、被災した建物がそのまま残っていたり、更地がたくさんあったりして、時間がものすごくゆっくりと流れている気がした。「ここはまだ震災の中にあるのかもしれない」と思われた。

印象的だったのは、釜石の公衆浴場へ行く途中で見た、いくつもの瓦礫の山だ。集めたもののそれ以上処理は行われなかったらしい。忘れ去られたように静かにそこにある。復興は進まないのに人々の意識から消えてゆく、行き場のなさ重なって、とても切なくなった。

もう一つ。初めて「個」が見えたということ。テレビや新聞による情報は、被災者の個々にフォーカスするものではない。よって、唯一無二なはずの人格は、無機質な記号でしかなくなってしまふ。しかし、被災地へ赴いて、建物を見たり被災者の体験談を聞いたり、被災直後の生々しい写真を見たりすると、亡くなった1万5千人以上の人々、いまだ行方不明の人々、大切な人も物も奪われた人々のそれぞれにストーリーがあったことがわかる。この感覚は、イスラエルのホロコースト記念館を訪れたときと同じだった。「犠牲者600万人」という数字の陰に顔を見つけてあげるのだ、と記念館のガイドが話していたのを思い出す。私が大槌町で経験したことは、それと同じだった気がする。震災が歴史の一部になりつつある中で、もう一度震災を見つめなおす大切な機会になった。

大槌町では、イスラエル、パレスチナ、日本の全員が被災者の悲しみに思いを馳せ、一日も早い復興のために祈った。みんなで大笑いしたり、うるさくして怒られたりもした。しかし、東京に戻り彼らの話をゆっくり聞いてからは、彼らは紛争地から来

たのだということを実感した。特に、紛争に関する体験のシェアリングでは、紛争によって影響され、恐怖を感じながら生活しているということが伝わってきた。紛争のない状態に生きる日本の若者は、平和は努力して維持するものだということを忘れてしまう。言い換えれば、平和の問題に関して鈍感だ。だから、イスラエルとパレスチナの若者の話を聴くことで、平和な日常の脆さと、平和構築・維持の難しさを再確認した。

2週間けんかもなく楽しく過ごせたことは、個人で良い関係を結ぶのは可能だということ。国、宗教、民族同士の大きな紛争に対しては、私たちは無力かもしれないが、小さな平和を作っていくことはできる。プロジェクト成功はその証拠だ。

マザーテレサは、平和を実現したいのなら、帰って家族を大事にしろと言った。まずは、家族、友人間でのささやかな平和を。そしてそれがいずれ大きな平和につながることを、参加者全員が強く望んでいるし、そのために働くことを望んでいる。

◎印象に残る人々

齋藤 鉄也

ボランティア活動で築いた、被災者との平和の架け橋。印象に残る場面は3つある。

まずは菜の花プロジェクトの金山さん。被災翌日から大槌川周辺の瓦礫を取り除き、菜の花で川周辺をいっぱいにする活動をされている。同時に、経験に基づいた紙芝居で震災を伝えている。私は震災当時、遠く離れた東京におり、食べ物も電気もあった。紙芝居の中で、私と同じ高校生が被災者でありながら、小中学生の震災孤児ら下級生の世話役として被災初日からボランティア活動を行っていたと聞いた。当時の私が何もできなかったことが悔や

まれる。川沿いには毎年鮮やかな菜の花の黄色が広がるそうで、次の春にはぜひ訪れたい。

2つめは大槌町で被災した及川夫妻。お宅ではテレビで放送されないビデオを見て、津波がどれほど恐ろしいものかを見せつけられた。及川さんの言葉で最も印象に残っているのは「黒いカーテン」という表現だ。津波はふだん浜辺に打ち寄せる小さな波とは根本的に違うものだということだ。

その後、釜石の銭湯に行く途中、ビデオで見た場所が現れた。目の前に広がる瓦礫を見て、大きな防波堤を根こそぎ壊して町をさらった津波の恐ろしさを学んだ。

『花は咲く』を四力国語で披露したときに及川さんが見せた、くしゃくしゃの笑顔が印象的だった。

3つめは、ロックフェスティバルでの交通整備と一緒に仕事をしたボランティアスタッフの一人。彼は津波に流されたが電信柱につかまって助かったそう。これがきっかけで「以前はこの町を早く出たい」という思いから、町の復興を自分の手で成し遂げたいと、気持ちが変化したそう。話すうち、ボランティア活動について考えさせられた。日中、仮設住宅に残される年配の方々や、移転を余儀なくされての地域共同体の崩壊などの問題が、被災者との対話で初めて見えてきた。

東京の活動では、イスラエルとパレスチナの若者の間に「平和の架け橋」を築いた。彼らの話を聞いてわかったのは、ニュースで報じられる場面が全てではないということだ。報道には制作者側の意図がみられる。紛争中でも、市民同士は仲良くできていると思っていることがわかった。

大槌町での活動で心をゆるし合えたから、本音で語り合い「平和の架け橋」をかけることができたのかもしれない。しかし私が思うに、彼らの心には

2015 スタディーツアーのお知らせ

イスラエル、パレスチナを訪ねて聖地と世界の平和を考えるスタディーツアー
「平和を願う対話の旅」、2015年も実施します!

* 2015年3月5日(木)～16日(月)【12日間】

* ツアー代金(予定) ￥約250,000(学生) ￥約320,000(社会人)

* ホームステイ(学生のみ)、難民キャンプ、分離の壁や検問所を見学、死海観光など盛り沢山、現地の青年たちとも交流できます。

事前研修も
行います

1/24～25、
2/11
東京都内にて

お申込み・お問合せは

03-6908-6571

またはE-mail (当法人事務局)

ispalejpn@google.com

すでに「平和の架け橋」があったのではないか。国や宗教に関係なく、同じ人間として接することで対話が成功し、それが「平和の架け橋」になったと信じている。



▲大槌ベースで、大津波のビデオを見る。「愛しいよ、愛しいよ、悔しいよ、悔しいよ」、バックミュージックの言葉に涙する。

◎私にもできることはある

大場 夏希

私は大学で民族紛争や平和学を専門にしており、学問として「紛争解決」に関心を持ってきた。また、これまで何度かボランティアを計画したが実現せずに3年半を過ごし、これが大学生活で最後のチャンスだと考えた。この2つの理由で本プロジェクトへの参加を決めた。学んだことの一部を記したい。

プロジェクト直前、ガザ空爆の報道が連日取り上げられ、これから会う新たな友人にどう接すればよいか迷いながら当日を迎えた。東京駅で対面した彼らはイスラエルもパレスチナも関係なく打ち解けており、私には見分けがつかないほどだった。新幹線の中で話は弾み、若者はこれほど簡単に仲良くなれるのだと感じていた。しかしこの時私が見ていたのは彼らのほんの一部だったように思う。

大槌町でのボランティアや共同生活を経て人間性が見え、紛争に関する本音に触れる機会が徐々に増えた。このプロセスは非常に貴重な経験だった。誰かが食器洗いをしていると必ず手伝う人、少し暗い雰囲気になった時におどけて場の空気を変える人など、多様な個性が光り、相互に受け入れ、一人ひとりに居場所があった。そんな生活の中で、イスラエル、パレスチナ、日本の区別が生まれるのは紛争のニュースが小さな声で話題に上る時だった。紛争の話をする時、主語は「私」や「あなた」ではなく、「政府」や「犯人」だった。私たち一人ひとりの間には紛争なんてないのだと確信した。

大槌町での滞在を終えた頃、イスラエル・パレスチナの間で政治的話題は避けようという自主的な合意があったことを知った。目の前のボランティア活動に集中する生活は「平和で天国のような場所に休暇に来ているようだった」と表現した人もいた。それほど、紛争が彼らの母国の日常になっているのだ

と気がつき大きな衝撃を受けた。同時に、これほど相手のことを気にかける温かい心の持ち主たちの国の間で、なぜ闘いが続けられるのかと疑問をもたざるを得なかった。そこで改めて、紛争は個人の間にはなく、もっと大きな、得体の知れない存在の間にあるのではないかと感じるようになった。大槌町での経験は私に、人間の繋がりの温かさを教えてくれた。海と山に囲まれた美しい土地、隣人の顔の見える生活は、神奈川で生まれ育ち東京の大学に通う私にはとても新鮮だった。津波の映像で目にした場所を実際に通り過ぎててもなお、4年前、そこに真っ黒い壁のような津波が押し寄せ多くの命や生活が奪われたとは信じ難かった。震災の経験談を聞けば聞くほど自分をその立場に置くことの難しさを知り、私にはなにもできないことをじれったく感じた。

私は中東紛争の当事者ではないし、大槌町の復興に携わることもない。どちらにも「部外者」かもしれない。しかしだからといって何もできない訳ではない。私が相手を気遣う限り、私にもできる事はあるという大きな希望を得られた。私の取り組みが当事者にどんな影響を与えられるのか、どのように関わるか、という問いへの答えを自分なりに追求して行きたい。

支援金の払い込みが
クレジットカードでも
可能になりました

郵便局に行かなくてもOK!

当法人webサイト内の、
支援金払い込み窓口から払い込みできます。

聖地のこども

検索

<http://seichi-no-kodomo.org>

読者の皆さんはご存じでしょうが、パレスチナ自治区はヨルダン川西岸とガザ地区に分かれています。西岸の自治政府はパレスチナ民族解放運動を主導してきた政治組織ファタハが、ガザの自治政府はイスラム教組織のハマスが支配しており、両地域は政治的にも分断されています。国会に相当する評議会の選挙でハマスが勝利したのがきっかけですが、ファタハ系の自治政府高官らの腐敗が有権者の不評を買ったのが、その背景にあります。

ハマスは医療、福祉などでの地道な活動で民衆の支持を広げました。一方で、ハマスはイスラム国家の実現を目指すムスリム同胞団の流れをくみますから、住民の日常生活もイスラム法で縛ろうとします。現代において宗教国家を実現した国としては、1979年のイスラム革命で故ホメイニ師を最高指導者としたイランの例があります。筆者は特派員としてイランにも赴任していたことがあり、宗教が国家の権威である社会を見聞しました。街にはコミテという、風俗取り締まり警察ともいべき人々が巡回し、女性がきちんと髪を隠し、体のラインが露わな服装をしていないか、未婚の男女が連れ立って歩いているかなど、イスラム教の決まりに背く者に目を光らせていました。

最近訪れたイランはコミテの存在もなく、女性がかぶるスカーフが頭髪を十分に隠してなくても、あるいは公園で明らかに未婚の男女がいちゃついても、取り締まられる様子はありません。ずいぶん普通の国になってきています。それに対し、ガザではかつてのイランのような風俗取り締まりが行われるようになったと聞いています。

そこへいくとイスラエルは、国が宗教的規制など設けない自由な国のようですが、ユダヤ教で安息日とされる土曜日は公共の交通機関は止まり、商店も原則として開けてはならないことになっています。休日を楽しみたい「世俗派」の国民には不評ですが、これらは法律で決められていることです。国会の議決のキャストイングボートを宗教政党が握っているため、宗教的要求が通るから起きる事態です。

総選挙で小政党でも議席を取りやすい比例代表制をとっているイスラエルの国会は常に小党乱立で、1948年の建国以来、第1党が絶対多数を制

したことはありません。どの政権も宗教政党の助けを借りないと票決で過半数を得られない状況が続き、引き替えに宗教的要求をのんできたのです。筆者がエルサレム支局で特派員をしていたころ、手厚い子供手当が支給される法律ができました。恩恵を被ったのは「産めよ、増えよ、地に満ちよ」の旧約聖書の教えに沿って子沢山の家が多い宗教政党支持者でした。宗教勢力の「少数派による支配」に憤る我が支局助手は「宗教上の理由から兵役に就かずにすむ人々が、兵役を務め、税金をしっかりと納めている我々よりも優遇されている」と、苦々しげに言っていました。

とはいえ、こうした宗教上の規制や不公平とされていることも、合法的な手続きを経ているものです。それでいえばハマスも、2006年1月の評議会(パレスチナ自治区の国会に相当)の選挙で過半数の議席を獲得、自治政府首相もハマスから合法的に選ばれていました。しかし、ハマスがイスラエルに対する武装闘争路線を維持しているため、アメリカやEUなどからテロ組織と認定され、支援が止められました。このような背景の中でファタハ側は非常事態を宣言してハマス政権を非合法化したのですが、ガザ地区で強い勢力を持つハマスは翌年、武力でガザの実権を握ったのです。

確かにハマスは、対イスラエル武装闘争を主張するだけでなく、実際にロケット攻撃なども仕掛けています。しかし、テロ組織と呼ぶ党派が代表しているからといって、その地域の住民全体をテロリストと見なすかのように封じ込められ、イスラエル軍によるハマス掃討作戦では巻き添えにされても仕方ないとばかりに扱われてはたまりません。そんな異常事態を支えているのは、アメリカのブッシュ前大統領が唱えだした「対テロ戦争」という標語で、テロとの戦いと言えばどんなことも正当化される風潮が蔓延しています。

イスラエルのネタニヤフ政権は、パレスチナ自治区の正当な代表とみなされているファタハ系の自治政府をも、それがハマスと和解して統一した政府を作れば(現にこの夏、暫定統一内閣作りに動いています)、「テロ組織を受け入れた」と称して交渉相手

にしない態度をとっています。しかしそれでは、ハマスの構成員だけでなく支持する人々も壊滅させなければパレスチナ側との交渉はできない、ということになります。

現在イラク、シリアで「イスラム国」という過激派が勢力を伸ばし、イスラム教に基づく支配を標榜して他教徒の存在を許さず、女性の人権を無視する

蛮行を繰り返しています。このような話し合いの余地を見出せない暴力組織と、「テロ組織」という呼称でひとくくりせず、ハマスのどういう主張が受け入れられないのか、どういう問題なら話し合う余地があるのかなどを探り、交渉の場に引き出さないかぎり、和平交渉の再開・進展は望めないでしょう。
(元朝日新聞特派員=中東地域担当)

コラム 私が暮らすイスラエル⑤

鳥居 亜由美 2010年度プロジェクト参加者。テルアビブ在住。

新しい感情

51日間続いたイスラエルの「プロテクティブ・エッジ」作戦が、ガザとの無期限の停戦合意に至ってから、約2ヶ月が過ぎた。私の住むテルアビブにも一日に何度かガザからロケット弾が飛んできて、サイレンの音を聞いてはシェルターに避難するという生活が続いた。iPhoneに入れている「Red Alert」という、ロケット弾が飛来する度にアラームで教えてくれるアプリは、「イスラエル全土」と設定しておく、24時間常に鳴りっぱなしだった。ガザからのロケット弾は、イスラエル軍のアイアン・ドームという兵器で着弾する前に大半が迎撃されるのだが、その迎撃音は花火が打ち上がるときの、あの「バン・バン」という音に似ており、停戦に至ってからもしばらくは、大きな音を聞く度に自然と体が強ばった。停戦後、休暇で出かけたイスタンブールで、ボスポラス海峡に美しく打ち上げられた花火さえも、心から楽しむことができなかったことを思い出す。また、シャワーを浴びているときも、車を運転しているときも、常にサイレンが鳴る気配を感じながら生活していた。風の音が、サイレンの音に聞こえることもあった。

気づけば、そのような、ある種トラウマティックな症状は癒え、風の音や花火の音が、「サイレン」や「ロケット弾」を思い出させることもなくなった。ガザとの戦闘中、仕事は通常通りこなしていたし、怯えからホームシックになるようなこともなかったが、そのごくごく日常の風景の中に、「サイレン」だ

の「ロケット弾」だの非日常的なものが見え隠れするという独特の緊張感が、自分の心と体を「分かりにくく」疲弊させていたように思う。

一方でガザの様子に関しては、ガザにいたわけではないので、日本にいる人たちと同じような距離感で、心

を痛めていたとしか言えない。イスラエル軍がガザ市民に対して行ったことを擁護するつもりはさらさらないが、お互い暴力を振りかざす以上、どちらかの側にだけ寄りかかることもできない。むしろ、自分がどちらかの側に住んでいる場合、こちら側（イスラエル）が相手に何をしているかよりも、相手側（ハマス）に自分たちが何をされているのか、される可能性があるのかということが、自分の身を守るためにより近々の「関心事」であって、余裕がない中では相手側の犠牲者に気を配ることは二の次になった。私はイスラエルで、ロケット弾に恐怖を感じ、サイレンの度に家族の安否を心配するイスラエルの人たちを見た。イスラエル人でも、反パレスチナでもない、たまたまそこにいた日本人の私を感じた、昼夜問わずロケット弾攻撃から市民を守ってくれたイスラエル軍への感謝と、相手側の状況に心を配る余裕のなさは、今回の経験をするまで私が考えたことのなかった新しい感情だった。



▲イスラエルでは全ての建物にシェルター設置が義務づけられている。

平和の架け橋プロジェクト 2014 から



▲大槌側河川敷でのボランティア活動後、ひと遊び。



▲旧大槌町役場の前で。善光寺玄証院住職の福島師が慰霊のために読経した。



▲文化交流会で、ご出席の皆さんにごあいさつ。



▲地元でお世話になった及川さんから被災当時の体験談を聴く。



▲大槌町での「文化交流会」で、東北応援歌「花は咲く」を歌う浴衣姿の若者たち。



▲ JICA 東京国際センターでの報告会。グループに分かれて、支援者の方々と分かち合い。

町で出会った子どもたち



写真提供 舎川春佳、ヤクブ・ガザウィ、鳥居亜由美